

天梯

緒野雅裕

彼は、考えていた。自分が歩んできた道のりを。人間の生命と知性の謎を解き明かすことに捧げた五十年の研究者生活を。そして、その意義とはいったい何であったのかを。既に何百回、何千回と繰り返えされてきたそれらの思考は、創造的なものでも発展的なものでもなく、次には進めるけれども外には出られない、そうといった類のものであった。そんな思考で占められた彼の重たい頭は、左手の頬杖によって支えられ、右手ではペンをゆらゆらと揺らしながら、目は壁の時計の秒針を黙々と追いかけていた。時刻はもう真夜中を過ぎようとしているのに、明日の講演の原稿が一時間も前から全く進んでいなかった。彼が眺める時計が規則正しく刻む、チク、タク、という音が、妙に大きく書斎に響いていた。

彼は、おもむろに大きな溜息をつくと、放り投げるようにペンを机に置き、椅子を回して後ろを向いた。電源を切られ、ガラスケースの中に整然と並べられた様々な形のロボットたちが、無表情に彼を見つめていた。眼球を模した二台のカメラが出目金のように頭部から飛び出しているもの。不釣り合いに大きな掌を重そうに吊り下げているもの。下半身がなく、桃色の人工皮膚に覆われた上半身が箱に据え付けられているもの。そんな、どこか哀れな容姿のロボットたちの一つ一つこそが、彼が五十年間の研究者人生で積み上げた、輝かしい業績の数々なのであった。あるロボットは一人の顔と名前を覚え、そのひとりひとりに正しく挨拶をすることができた。あるロボットはレストランで注文を取り、客にコーヒーを注ぐことができた。あるロボットは聴いた音楽の曲調を判別し、楽しい曲には楽しい表情を、悲しい曲には悲しい表情を顔に作ることもできた。彼がそうした成果を発表するたびに、学界は一樣に賞賛し、新聞やテレビはこぞってニュースにした。ロボットが人間になる日は近い、と。しかし、そんな輝かしい成果をいくつ積み上げてもなお、彼が人間の生命と知性の謎に近づいたと感じたことは、結局一度たりともなかった。いや、むしろ、遠ざかっていく気さえした。

それはちよつと、梯子を掛けて天まで登ろうとしているような感覚だった。

天に輝く星のひとつを自分の掌に収めようと、彼は五十年間、梯子を登り続けたのだった。地面に立っている人々から見れば、彼は既にとつもない高さに達したように見えるのだろう。しかし、そんな高みに立つてもなお、星も月も太陽も、地面にいたときと全く同じ高さで光り輝いていた。いくら登っても地が遠のくだけで、天が近くはならなかった。人々の賞賛とは裏腹に、彼が地を見下ろして感じるのは孤独であり、天を見上げて感じるのは絶望であった。しかし残酷にも、天の星たちは淡い希望の光を彼に降らせ続け、地にいる人たちは惜しめない拍手を彼に贈り続けたのだった。その光に吸い込まれるように、あるいは拍手から逃げるように、彼は梯子を登り続けた。次こそは、また次こそは、と。そうして気がついたら、五十年の月日が経っていた。彼の心には、遂にひとかけらの喜びも達成感も残ることはなかった。残ったのは、書齋に並ぶ数々の哀しきロボットたちと、それらが彼に与えた両手に抱えきれないほどの栄誉と名声、そして救いようのない孤独と絶望だった。

彼は明日、身に余る栄誉を受けて、その五十年間の研究生生活を閉じる。彼の退任記念講演には、特別に大学の大讲堂が割り当てられ、彼の顔が大写しになったポスターが、一週間も前からキャンパスのあちらこちらに貼られていた。彼は、世間からもてはやされることは嫌いではなかった。しかし、世間からの賞賛と自分の絶望とのギャップに常に苦しんできた。彼は時に世の無知を嘆き、時に己の孤独を嘲った。自分が無知ではいられないことを呪うことさえあった。生命と知性の謎を解くという崇高な目的など忘れ、人間の真似をするロボットを造ることに安易な喜びを見出し、それに対して捧げられる賞賛を素直に受け取ることができたならば、それはどんなに愉快で気が楽だったろうかと。

思い返せば、五十年前、彼がこの世界に飛び込んだ頃、彼は野心に満ち溢れた、将来有望な若手研究者だった。人間の生命と知性の謎を解き明かすことこそが、自分の人生をかけた使命だと思っていた。そして彼にはそれを成し遂げる自信があり、その自信を裏付ける若さと知恵もあった。もしも自分が引退する時までその謎が解けなければ、その時こそは神様を信じてやろう、とも思っていた。それからがむしゃらにその謎を追いかけた五十年。あるときから、彼の自信は焦りに変わり、焦りは絶望へと変わった。そして遂に、ロボットに生命の火が灯ることも、知性の芽が育つこともなかった。

(俺は今、神様を信じられるか?)

彼は首を横に二、三度振り、そして深い溜息をついた。

彼のいる書斎は相変わらず、壁の時計が刻む音に支配されていた。彼は再び椅子を回して机に向き直り、書きつける言葉も見当たらず、機械的にペンを拾い上げた。自身の輝かしい業績の紹介、それらが社会にもたらした利益、そしてロボット工学の明るい未来。書きかけの原稿用紙に並んでいるそんな陳腐な内容に、彼は激しい嫌悪感を覚えた。彼はいつそのこと、大講堂の壇上からこう叫んでやりたかった。このどろろが素晴らしいんだ。明らかな失敗ではないか。俺の五十年は敗北だったのだ、と。しかし、彼がそんな大胆な試みを実行することは決してないだろう。なぜなら、世はそれを望んでおらず、また許しもしないことを、彼は冷静に理解していたからだ。自信に満ち溢れ、世に希望を与え続ける、現代において最も成功した研究者。それが、世が彼に投影する像であった。その通りに振舞うことこそが、世が彼に与えた使命であり、同時に彼自身の内にある僅かな希望の灯を消すまいとする必死の努力、あるいは自己暗示でもあったのだ。

つまりは、彼には梯子を上へ登り続ける自由度しか残されていないのだった。しかし、誰を恨むことが出来よう。彼から自由度を奪ったのは彼自身なのだ。人は、地に生まれ落ちた時に、地面の上を前後左右へ動く自由度を与えられる。ところが彼はある時、一本の梯子を手に取り、それを登り始めた。その瞬間から、彼は前後左右の自由度を失い、それと引き換えに上へ向かう自由度を得た。それは彼が望んだことだった。そして、始めはそれに満足していた。ぐんぐんと遠ざかる地を見下ろすのは快感そのものであり、いつの日かその手が天に届く妄想は、官能的な魅力に満ちていた。だから彼は登り続けた。もはや後戻り出来なくなったことに気付いたのは、孤独が快感に、絶望が官能に、すっかり取って代わった後のことだった。

こんな筈ではなかった。こんな筈ではなかったのだ。彼は願わくば、タイムマシンで五十年前に戻り、その頃の自分に、この偉大なる挑戦の悲しい帰結を教えてやりたかった。しかしそんなことをしたところで、当時の彼は全く聴く耳を持たないであろう。なぜなら彼はその頃、人間の叡知が万能であることを信じて全く疑わなかったし、目覚ましい科学の進歩はそれを確かに裏付けている

ように思えたからだった。

人間は、リングが木から落ちる原理を天体の運行にまで一般化し、その正確な予測を可能にした。神がサイコロを振ることを許した人間は、その対価として、微小の原子核の振る舞いを数学的に記述する手段を得た。一人の天才科学者の、落下するエレベーターに閉じ込められる空想から発した理論は、人間に宇宙の始まりと終わりを予測する力を与えた。極小から極大まで、この世の始まりから終わりまで、限りなく広がりゆく人間の叡知。そのまさに中心に唯一ぼつかりと開いた穴、それが人間自身であった。千年先の木星の位置を正確に予測できる人間が、一秒先の人間の行動すら予測できない。一ミリの千万分の一原子から、百億光年先の銀河まで見渡せる道具を持つ人間が、目の前の人間の心を覗く手段を何ひとつ持っていない。彼が人生をかけて挑んだのは、もつとも人間の身近にあり、同時にもつとも謎に満ちた対象である、「人間」そのものだった。人間を人間の手で造ることによって、人間の生命と知性の謎を、根本から解き明かそうとしたのだった。

そして、彼は失敗した。梯子の終わりは見えず、天は未だ天のままだった。地にいる人はこう言うかもしれない。天まで辿り着かなくなつて、そんな高みにまで登れたんだ、大したものではないか、と。彼はそれにこう答える。天に届かなければ、地にいるのと同じなのだ、と。

彼は再びペンを放り投げ、腕を組んで、椅子の背もたれに寄りかかった。彼の思考が同じループを何度も何度も循環する一方、壁の時計が刻む時間は、一直線に前へと進んでいた。生命と知性の謎を追い続け、遂に謎の扉を一枚も破ることなく、今や彼自身の生命いのちは燃え尽きんとし、知性の泉は枯れ果てんとしている。単に時間が足りなかつただけだろうか。それともこれが、人間の叡知の限界なのだろうか。分からない。もはやこれ以上腕を組んで考えても、何も分からないことは分かつている。でも、分からないのだ。分かっている。分からないことを。分からぬものは、分からないのだ。でも分からない。なぜ分からない。分からない。分からない。分からない。

気が付くと、彼は大講堂のステージの袖に立っていた。首にはいつの間にかネクタイが巻かれ、手には完成した原稿が握られていた。司会が彼の名を紹介すると、講堂に嵐のような拍手が巻き起こった。次いで、彼がステージの中央へと進み出ると、客席の右から、左から、フラッシュの鋭い光が次々と彼に投げつけられた。

彼は演壇に立ち、客席を見渡した。大講堂の二階席まで埋め尽くした聴衆は、視線を彼の口元に集め、記念すべき第一声を今か今かと待っていた。彼は慣れた口調で、しかし言葉尻には大げさに感慨を込めながら、演壇の上に置いた原稿を読み上げ始めた。聴衆は皆、吸い込まれるように彼の話に聞き入った。彼が過去の輝かしい業績のいくつかを語ると、聴衆は一樣に尊敬の眼差しで彼を見つめ、彼がその理論を掻い摘んで説明すると、聴衆は一樣に腕を組んで大きく頷いた。そして話の区切りごとに、惜しめない拍手が彼に捧げられたのだ。

凡庸だった。自分の人生をかけた五十年の戦いに幕を下ろすには、あまりにも凡庸なセレモニーだった。彼の意識は、無知な聴衆に向かってありきたりな言葉で熱弁を振るう彼の実体から、徐々に遊離していった。聴衆が聴いている彼の熱い言葉とは裏腹に、遊離した彼の意識は、恐ろしいほどに冷めていた。

「私が開発したロボットたちは、今まで考えられていた限界を打破し、……」
聴衆から注がれる尊敬の眼差し。

（下らない。打破するべき限界は、もっともっと上にあるのに。）

「これらのロボットたちによって、人間社会の明るい未来が切り拓かれ……」

一樣に腕を組んで頷く聴衆。

（俺の話がそんなに面白いのか。この陳腐な話が。）

「ロボット工学は、更なる高みを目指して、今後も発展してゆくことでしょう。」
沸き起こる大拍手。

（俺はなんて無意味な寸劇を演じているのだ。止めたい。もう終わりにしたい。ならば、止めればいいじゃないか。そうだ、止めればいいのだ。止めよう。いい加減、もう、止めよう。）

そうして彼が決心をした瞬間、遊離していた彼の意識は、自動原稿読み上げ装置と化していた彼の実体に舞い戻った。彼は言葉を止め、少し間を取った後、

原稿から目を上げ、聴衆に鋭い視線を投げつけて、力を込めて宣言した。

「私の五十年は、失敗でした。」

すると、彼の期待に反して、今までと何も変わらぬ盛大な拍手が聴衆から捧げられた。彼は構わず続けた。

「私の人生をかけた本当の目的は、あのような哀れなロボットを量産することではなかったのです。」

聴衆たちは、皆でタイミングを合わせたかのように一斉に感嘆の声を漏らし、皆で示し合わせたかのように一様な尊敬の眼差しを彼に向けた。彼は、聴衆が自分の言葉を本当に理解しているのかを疑った。そこで、さらに語気を強め、話を続けた。

「あのロボットたちには、生命の灯が宿ることも、知性の芽が育つことも、決してありませんでした。」

聴衆たちは、まるで予めプログラムされていたかのように、一様に腕を組み、一様に大きく頷きながら、ますます真剣に彼の話に聴き入った。彼は何とかそのプログラムを上書きしてやろうと、短絡的な言葉を選んで、彼らに強く訴えかけた。

「皆さん、どうか理解して下さい。私の五十年の成果は、結局のところ全く無意味であり、故に完全な敗北であったのです。」

すると、聴衆たちは一斉に総立ちになり、今までにないほどに大きな拍手を彼に浴びせた。皆、一様に心から彼を賞賛し、あるものは目に涙まで浮かべて、手を叩き続けた。彼らが彼を見つめる目は尊敬の眼差しそのものであり、口々に叫ぶ賛美の言葉は彼への心酔の証左であった。

彼は背筋に寒気を感じた。怖い、と思った。何とかしてこの不気味な拍手から逃げたかった。そして、実際に逃げ出した。彼はおもむろに演壇を離れると、大股でステージの袖に下がり、聴衆が視界から消えると駆け出して、階段を下り、講堂の出口へと向かった。彼の背後からは、割れんばかりの拍手が彼を追跡し、触手を伸ばして彼の襟を引っ張り、強い力で彼をステージへ連れ戻そうとした。彼は両手でその触手を払いのけ、両足に全力を込めてその力に抵抗した。そしてなんとか玄関のロビーに辿り着くと、彼は大慌てで扉を押し開けて外に飛び出した。

しかし、扉を出た先にあったのは、ステージだった。演壇の上には原稿が置いてあり、満場の聴衆が講堂を埋め尽くし、彼らは一人の例外もなく彼に惜しめない拍手を捧げていた。彼らの尊敬の念で満ち溢れた目は、彼に講演を続けるよう、暗に脅迫しているかのようだった。

彼の筋肉は恐怖で硬直し、目は宙を泳いだ。彼は聴衆の脅迫に屈し、喉の奥から声を絞り出して話を続けたのだった。しかし、もはや何を話しても結果は同じだった。彼がどんなに聴衆の期待を裏切る言葉を投げかけようと、彼らから投げ返されるのは、一様な尊敬と、一様な賞賛の言葉と、そして満場の大拍手だった。そして、彼に向けて拍手が捧げられるたびに、その拍手が彼のいるステージを、上へ、上へと押し上げていくのだった。彼が何を話そうと、拍手はますます大きくなる一方で、それにあわせてステージも加速度的に上昇していった。いまや絶望的な高さにまで達したステージは、しかし未だに講堂の中にあり、聴衆はそのはるか下に遠ざかるうとも、聴こえる拍手は一向に遠くはならなかった。彼は泣きながら、もう止めてくれ、と訴えた。それに対して聴衆は心からの大拍手で応じ、ステージをさらに上へと押し上げた。もう十分だ、助けてくれ、と彼は叫んだ。それに応えて、鼓膜を打ち破らんばかりの拍手が沸き起こり、ステージはさらに上へと昇っていった。もはや立つことさえ辛くなった彼は、力なくステージの上に膝を着き、前方へと這い進んで、そのままステージの下へと身を投げたのだった。

かくして彼は、ステージの下へと落ちていった。その自由落下の間にも、満場の聴衆からの絶え間ない拍手が彼の体に突き刺さった。彼はもはや、一刻も早くその老体が地に叩きつけられ、その衝撃が骨と肉を碎き、魂が苦痛から開放されることを望んだ。しかし、その望みは決して叶わなかった。なぜならば、無限の高さを落ちるには、無限の時間を要するからであった。

そうして、無限の時間が経過した後、彼が降り立ったのは、またしても元のステージの上だった。演壇の上には原稿が置いてあり、満場の聴衆が講堂を埋め尽くし、彼らは一人の例外もなく彼に惜しめない拍手を捧げていた。彼らの尊敬の念で満ち溢れた目は、彼に講演を続けるよう、なおも脅迫していた。

もはやどこにも逃げようがないことを悟った彼は、隠れる場所を探した。そして彼は、演壇の下に潜り込んだのだった。外から見ると小さな演壇も、内は

意外に深かった。なおも背後から聞こえる拍手から逃げたい一心で、彼は四つん這いになって、演壇の奥へ、奥へと進んでいった。やがて背後の拍手ももう聞こえないほどに小さくなった時、彼は急に、明るく広い場所に出た。

そこは、ステージの上だった。演壇の上には原稿が置いてあり、満場の聴衆が講堂を埋め尽くし、彼らは一人の例外もなく彼に惜しめない拍手を捧げていた。彼らの尊敬の念で満ち溢れた目は、彼に講演を続けるよう、なおも脅迫していた。

そこで、彼はやっと気付いたのだった。これは夢なのだ、と。こんな理不尽なことは夢以外で起こりうるか、と。彼は、目を覚ませ、と念じた。起きてこの悪夢から抜け出せ、と自身の体に命令した。

そうして、彼は目を覚ました。しかし、目を開けて体を起こすと、やはりそこはステージの上だった。演壇の上には原稿が置いてあり、満場の聴衆が講堂を埋め尽くし、彼らは一人の例外もなく彼に惜しめない拍手を捧げている。彼らの尊敬の念で満ち溢れた目は、彼に講演を続けるよう、なおも脅迫していた。

そんな馬鹿な。まだ自分は夢から抜け出していないのか。

彼は許してくれと言わんばかりに、なりふり構わず涙を流して聴衆に訴えた。

「私は…ロボットに生命と知性を宿そうと…」

彼の声はもはや拍手に掻き消され、一メートル先にも届かなかった。

「それが人類に与えられた、最後の謎を解くことに…」

地鳴りのような拍手は、一層大きくなるばかりだった。

「しかし人間の生命と知性とは、結局のところ…」

もはや彼は、満場の聴衆が放つ拍手の圧力に屈服し、これ以上喋ることも、逃げることも、隠れることもできなくなった。無慈悲な拍手の嵐は、講堂を囲む壁に共鳴し、演壇に立ちつくす彼の体を、矢となって四方八方から容赦なく貫いた。空気も拍手となり、彼がソレを吸い込むと、肺の中からも拍手が沸き起こった。ヤガテ拍手は押し寄せる津波ともなり、ステージの上の彼の体を、拍手で満たサレタ海の中へとサラッテいった。拍手。矢が貫いた傷口カラ拍手の海水が彼の体に侵入シテユキ、拍手、今や彼ノ体の全てが、彼に向ケテ拍手ヲ捧げていた。拍手。拍手。彼は叫ンダ。拍手ダッタその声は。拍手。モガイタ必死に彼は。手と足ヲ拍手の波ニ彼八奪われた。拍手。拍手。つぶった目ヲ

彼は。拍手。侵入シテイタ内側にまでも瞼の、既に拍手八。拍手。拍手。考工
テイタ、彼は。拍手。道のりを歩ンデキタ自分が。拍手。手白手。手白手。研
究者生活ヲ五十年の、人間ノ生命と知性の謎を解キ明カスことに捧げた。手白
手。手白手。そして、何デアツタのかをイツタイその音心義とは。手白手。手
白手。既に。手白手。手白手。創造的ナものでも。何百回、手白手。何千回と
ソレラの田心考は。手白手。手白手。繰り返えされてきた、外には山山られな
い、モノでもなく発展的な、手白手。手白手。アルことを、ソウイツタ類のも
のでアツタ、手白手。手白手。進メルけれども次には。手白手。手白手。手白
手。手白手。手白手。手白手。手白手。手白手。手白手。手白手。手白
手。テシロテ。テシロテ。テシロテ。テシロテ。一丁シロ二丁。一丁シロ二丁。
一丁シロ二丁。一丁、ノロ二丁。一一一、ノロ二丁。一一一、ノロ一一一。一
一一、ノ一一一一一一一。一一一、ノ一一一一一一一。一一一、ノ一一一一一
一一一。

カタツ、と扉が開く音に、彼はハツとして目を覚ました。

「あら、起しちゃってごめんなさい。お茶を持ってきたのよ。」

それは、聞き慣れた娘の声だった。瞼をうつすらと開けた先にあったのは、
ステージの上の演壇ではなく見慣れた書斎の机で、その上にあつたのは未完成
の原稿だった。曇る目をこすり、安堵感に胸を撫で下ろしつつ、

「うん。」

と、ぶつきらばつな返事を返した。

「居眠りなんかして、風邪でも引いたら大変よ。」

彼女の高く柔らかな喋り声が、彼の乾いた脳に染み込む時、少々の痛みのような
感覚が伴った。

彼女は彼の様子を気にすることもなく、ペタペタとスリッパの音をたてて、
書斎に入ってきた。お茶を載せた丸い盆を、ロボットを収めているガラスケー
スの上に置いた後、彼の左脇に来て、お父さんの机は蟻が歩く場所もないね、
などと文句を言いながら、机の上に散らかっていた本や学会誌などをガサガサ

と奥へ押しやり、湯飲みを置くスペースを作った。彼は娘のてきぱきとした動きをぼんやりと眺めながら、彼女の濡れた髪から漂って来るシャンプーの匂いに気を取られていた。

「熱いから、気をつけて飲んでね。」

そんなことを言いながら、彼女は湯気の立つ緑茶の湯飲みを運んできて、彼の左腕の横にそっと置いた。彼女が着るカナリアイエローのパジャマのひらひらとした袖が、彼の腕をくすぐった。緑茶の香ばしい香りがほのかに漂った。

「お父さん、老人の夜更かしは体に毒よ。明日は早いんですよ。」

そう言つと、彼女は彼に返事を促すかのように、彼の肩を三、四度揉んだ。彼は、

「うん。」

と臍抜けた返事をしながら、緑茶の中をゆらゆらと漂う茶柱の動きを眺めていた。

「じゃあ、私は寝るね。無理しちゃだめだよ、お父さん。」

そう言いながら、彼女は彼の肩をポンと叩くと、再びペタペタとスリッパの音を立てて歩み去り、空の盆を持って書斎から出て行った。

カタツ、と音を立てて扉が閉まると、再び壁の時計の秒針が刻む音が部屋を支配した。呆然とした彼と、無言のロボットたちだけが、再びその部屋に取り残された。彼は今、自分の脳が何かを必死に考えようとしているのを感じる一方、その「何か」は脳の表面を洗うだけで、実際は全く何を考えているわけでもない気もした。彼の抜け殻のような目は、時計の秒針の動きを黙々と追いかけていた。

その秒針が、一度、二度、そして三度回つて元の位置に戻ったとき、彼は思いついたように緑茶の湯飲みを手を取った。それを口元に運び、吹いて冷ますと、温かい湯気が顔を覆い、眼鏡を曇らせた。不意を食らった感じがした。彼はゆつくりと湯飲みを傾け、茶をすすった。温かさが口の中にも広がった。その温かさは喉を通つて胃の底へと落ち、やがてゆつくりと消えていった。それと入れ替わるように、別の温かさが彼の目の淵に現われ、それは頬を伝つて流れ落ちていった。彼は湯飲みを口から離すと、焦点が合わぬ目を、再び壁の時計の秒針に戻した。